

道庁爆破テロ事件を スクープ激写した

元毎日新聞社
カメラマン

佐藤正氏が回顧する「50年目の真実」



50年前の3月2日、札幌の空は長かった冬の終わりを告げるかのよう
に晴れ渡っていた。道庁ではいつもの通勤風景がみられたが、乾いた爆発音
が平和な空気を一変させることに。1階は血まみれの負傷者たちが呻く地
獄絵図と化していた。

この道庁爆破テロ事件の現場にいち早く駆けつけ、スクープ（「サンデー
毎日」1976年3月21日号に掲載）をモノにしたのが、毎日新聞北海
道支社に勤務していたカメラマンの佐藤正氏だ。あの日、佐藤氏は何を目
にし、何を感じたのか——。西区のご自宅に伺い、当時の記憶を振り返っ
ていただいた。
（フリーライター・内海達志）

『無』の心境で撮影

その日の朝、佐藤氏
は毎日新聞社編集部か
ら何気なく窓外の風景
を眺めていた。写真で
みせる風土記の夕刊連
載を担当しており、天
気を確かめることが習
慣になっていたのだ。
すると、社屋と目と
鼻の先の距離にある道
庁のほうでバーンとい
う爆発音が鳴り響いた。
「その瞬間、ジャンパ

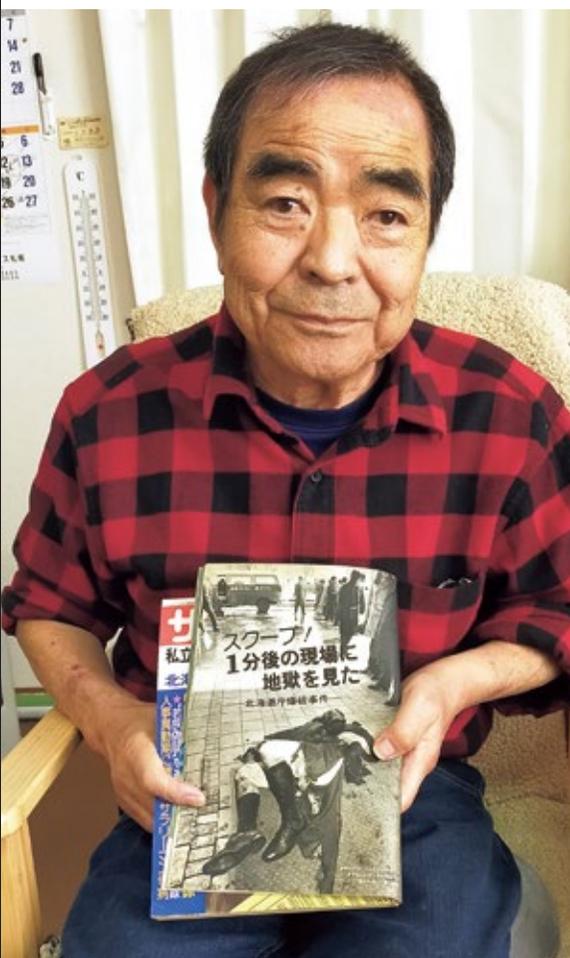
ーを着て、道庁西口へ
向かって飛び出しまし
た。カメラはすぐに撮
影できるよう準備して
いましたから、ポケッ
トに予備のフィルムを
5〜6本入れて。出勤
する人たちが、茫然と
立ち尽くしていたのが
印象に残っています」
あまりに早く現場に
到着したため、硝煙と
砂塵がひどく、収まる

のを待つてからフラッ
シュをたいたという。
そこは血まみれの負
傷者が転がっている阿
鼻叫喚の地獄絵図だっ
た。なかでもエレベ
ーター前に倒れていた女
性（犠牲者2人のうち
のひとり）の写真は衝
撃的だ。
「足は吹き飛ばされて
なかったと思います。
もう息絶えていたので
しょうが、私にはうっ
すらと目を開けている
ようにみえました。そ

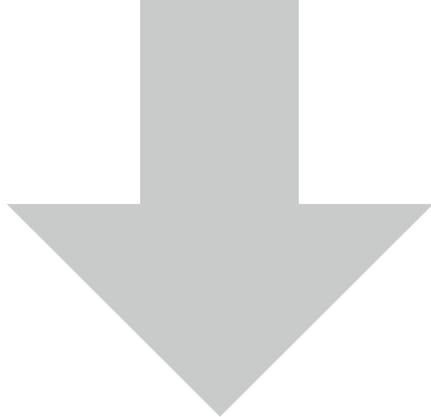
の表情がわかるよう、
角度を意識してシャッ
ターを切りました。撮
影しているときの心境
は『無』ですね。レン
ズ越しでなければ、と
ても正視できません
よ」
プロとしての責任感
からカメラを向けたも
の、相だな葛藤があ
ったであろうことは想
像に難くない。
消防士が、カット目
を見開いた男性に毛布

をかけている写真があ
る。もうひとりの犠牲
者で、その後、病院に
搬送されたのち亡くな
った。
「シャッターを押すか
否か、一番迷ったのが
この写真です。撮った
のはこの1枚だけ。こ
こで記録を残しておか
ねば、という思いで、
毛布をかける寸前に迷
いが吹っ切れました。
ただ、シャッターを切
った記憶がないのです。

無我夢中だったのでし
ょうね。50年後のいま
改めてみても、生々し
い記憶がよみがえって
きます」
この男性には、悲し
いサイドストーリーが
ある。巨額の保険金を
手にした夫人が、親戚
に貸した金の返済を巡
るトラブルで殺害され
たのだ。遺体は札幌国
際スキー場近くの脇道
で発見されたが、大き
な骨はほとんど残って



▲自身のスクープ写真を手にする佐藤正氏



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)